

京都市社会福祉審議会 第5回「ひきこもり支援の在り方検討専門分科会」摘録

○ 日 時

令和2年7月17日（金）午後6時30分～午後8時

○ 場 所

中京区役所4階第1会議室

○ 出席者

（委員）

岡田会長，源野委員，井筒委員，宇川委員，大澤委員，小野委員，小谷委員，
中川委員，松山委員，三木委員

（京都市）

村上副市長

<保健福祉局>

三宅局長，西窪部長，徳永室長，出口部長，北川室長，波床所長，関係課長ほか

<子ども若者はぐくみ局>

久保局長，上田室長，伊井担当部長，関係課長ほか

<教育委員会事務局>

関係課長ほか

○ 議 事

（1）京都市におけるひきこもり支援の在り方について（意見具申）（案）について

和田課長：（資料説明）

宇川委員：資料10ページ「5 むすびに」について、「中学卒業時や高校中退時に教育機関と連携できる仕組みを作ること」を検討すること」の記載があるが、常に連携しやすい関係が大切と考えており、福祉や教育がうまく連携できていないことが課題ではないかと感じている。中学卒業時や高校中退時に限定するのではなく、常に連携を取れる体制を作るべきである。

岡田会長：切れ目のない支援を実施するために、常に連携できる仕組みという表現に修正してはどうか。

小谷委員：不登校相談の対応では、学校や教育委員会に相談してうまくいかなかった場合、次に相談できる場所がない状況になる。当事者の方が市長に要望を出したとの話も聞いており、この窓口で紹介できることを待ち望んでいる。

窓口の実施時期はいつ頃か、また、よりそい支援員の専門性や資格はどのように担保されるのか。

なお、実施にあたっては支援調整会議の中で議論していくことと思うが、情報共有だけでなく、各部署からモデルケースを提案していくことや、目的を明確にして色々とトライするなど、支援する側が能動的に動いてほしい。

和田課長：現在、9月1日の再構築を目指して準備を進めているところである。

よりそい支援員の専門性については、委託事業の募集において、保健師、精神保健福祉士、社会福祉士等の資格要件を定めている。

井筒委員：包括的、具体的に捉えた資料であるが、パーフェクトではない。ひきこもりの課題は多岐多様であり、時代によっても変化していくため、運用にあたっては柔軟かつ発展的に考えていく必要がある。民生委員が相談を受けた場合、多くは保健福祉センターへ相談することになると思うが、誰がキーパーソンになり、どこの部署が対応するのか、具体的に教えてほしい。

小澤課長：どこの部署でないといけないというものではなく、まずは統括保健師やキーパーソンに相談いただければと思う。

井筒委員：現在は、統括保健師やキーパーソンという名称や部署がないと思うが、新たに設けるのか。

小澤課長：統括保健師は、各保健福祉センターの健康長寿推進課に在籍しており、キーパーソンも同課に配置する予定である。

久保局長：統括保健師は、健康長寿推進課担当課長のことである。

源野委員：資料6ページ以降の「気付き」「つなぎ」「支える」の中で、一番重要なものは「つなぎ」であると考えている。現状でも窓口が細分化されているなかで、民生委員が、また新たな窓口に対応していくのは非常に大変であるため、包括に相談しても福祉事務所に相談しても、そこからひきこもりの支援機関につながっていく仕組みであるとの表現が必要である。

現在は、親の介護とか、社会参加ができず経済的問題が発生しているとか、様々な課題に対して各機関が関わっている状況であり、ひきこもり状態を根幹の問題として関わっているわけではない。今回、京都市がそこを捉える仕組みを作ろうとしていることが分かる記載にしてほしい。

それと、表記が「気付き」になっているが、ひらがなの「気づき」の方が印象もやわらかいのでよいのではないか。

伊井部長：御指摘のあった「つなぎ」について、今回の再構築では窓口から保健福祉センターに繋がれたケースの支援方針を「支援調整会議」で決定するという新しい仕組みが作られたため、そこを強調した内容になってしまった。また、現在のひきこもり相談窓口には、ひきこもり状態にある方の1.7%程度しか支援につながっておらず、様々な支援機関がその支援の中でひきこもりの方を発見しているという現状にあるのかと思う。

8050問題の顕在化という背景も踏まえ、ひきこもりという切り口で支援する支援機関はないが、現在の各分野の支援機関がひきこもりのケースをどこにつなげたらいいいのか、資料を見れば分かるよう記載する。

また、「気付き」は「気づき」に表記を統一させていただく。

中川委員：これまでこの分科会に出席させていただき、議論してきた課題への理解が深まったので、大変感謝している。仕組み作りが大切であることと、その次のステップとして、アートの力でできるだけ早く介入すべきであると確信を持った。

6月からSW/ACをオープンして情報発信を行っているが、いずれにしても、アートの側からも引きこもり支援を共働していきたい。

三宅局長：前回分科会の中川委員の活動の報告から、ひきこもり状態にある方の働く場、学ぶ場だけではなく、表現する場という可能性を教えていただき、大変感動した。表現したことを認めてもらうことが、当事者の気持ちに火を灯すことにつながるので、文化芸術の分野からも、より実践的な活動に取り組む必要性を理解した。

和田課長：前回の中川委員からの御意見を受け、文化市民局を通じて、SW/ACとの連携に向けた働きかけを開始したところである。

小野委員：この資料を当事者や家族が見た際の表現にも気を付けたい。7ページの「早期発見・早期対応」といった視点は確かに重要だが、こういった記載をすることにより、ひきこもり状態が長期化している方や御家族が、自身は支援の対象外である、といった受け止めにされないよう配慮が必要と思う。

全年齢型の相談窓口の設置ということで、長期化している方も安心して相談できるような表記としてほしい。

岡田会長：御指摘を踏まえた表記とする。

三宅局長：御指摘のとおりかと思う。長期化しないよう支援することも重要だが、これまで社会問題としては潜在化していたという経過もあり、長期化されている方もおられることから、安心して相談いただけるよう表記を工夫したい。

三木委員：よりそい支援員は、京都市の中でこういった立場とすることを想定されているのか。資料6ページの図だけでは少し分かりにくい。

ひきこもり状態にある方は、年単位での長期的な支援を必要とされることも多く、支援者側が非常勤の職員等で1年や2年で変わっていくようでは、支援全体のマネジメントが困難になるのではないかと思う。

今回の支援体制案では中心的な役割を想定されており、社会資源があるのはよいことと思うが、京都市の中でどのように位置付けられるのか。

伊井部長：よりそい支援員は、委託事業の中で実施することを想定している。直営ではないが京都市としても必要な支援を行い、支援員を孤立させないよう十分に配慮していく。また、支援員は当初10名を予定している。

岡田会長：10名では足りないようにも思うが、まずはそういった体制でスタートされるということかと思う。

松山委員：社会資源のさらなる拡充はよいことと受け止めている。

支援対象者の環境を拡げていくことが重要だが、それが最も難しく、現状に止まろうとする方も多い。支援状況にミスマッチがあった場合は、誰が気づき、支援調整会議にどうつなげていくことを想定されているのか。

伊井部長：1人の支援対象者に同じ支援者がずっと関わり続けることは想定していない。居場所も含めて各段階に応じて支援者がバトンタッチしていき、支援全体の流れはキーパーソンが把握する。キーパーソンが情報を得て、支援調整会議の場で次のステップを考え、支援者をバトンタッチさせていくような仕組みを考えている。

岡田会長：その時々ニーズに合わせて各支援者が関わっていくものかと思う。関わっていく中で支援経過が分からなくなることがないように、仕組みを構築していただきたい。

小谷委員：資料9ページの「ひきこもりに関する社会資源の更なる拡充」の「京都の強みである寺社」のところで、何か連携等を考えているか。

和田課長：現時点で具体的なイメージは持ち合わせていないが、寺で居場所づくりをしているところもあると聞いており、そういった活動との連携を今後考えていきたい。

中川委員：京都の強みというわけではないが、教会も活発に活動しているところがあ

るので、視野に入れてみてはどうか。

小谷委員：社会的弱者と地域をつなげる活動をしている社会福祉士の方の話を聞いた中で、お寺でカレーを作る「カレー寺」というのを聞いたことがある。参考に検討してみてはどうか。

岡田会長：京都は学生のまちである。学生には多様な人材がいるので、活用してはどうか。

大澤委員：うまくまとめていると思う。資料9ページ「ひきこもりに関する社会資源の更なる拡充」について、ひきこもりを社会全体で支える、社会の認知度を上げることが重要であり、寺社も含めた様々な社会資源に積極的に情報発信することでネットワークが広がり、ひとりでも多くの苦しんでいる方を元の生活に戻していくことが必要と考えている。京都市には「京都はぐくみ憲章」の実践に向けて取り組んでいる京都はぐくみネットワークがあり、現在幹事長をさせていただいているので、ネットワークを構成する行政区実行委員会や幹事団体にひきこもりについて周知を図るとともに、行政からも積極的に情報の提供をお願いしたい。

源野委員：今回のひきこもり支援は、世代別や施策別に縦割りになっている取組に横串を刺したものだと思っている。相談機関や民生委員をはじめ、様々な社会資源が弱者に気づき、つないで支えている。そういったネットワークを活かし、ひきこもり支援を京都市がしっかり取り組んでいくことは、これからのコロナの問題も含めた新たな社会課題に向き合っていくことにつながると思う。文章では静かに書いてあるので、もっと立ち向かっていく決意を強調してはどうか。現在できていない取組に新たにチャレンジすることになるので、大きな課題にぶつかるとは思うが、私たちも一緒に関わっていきたいと考えており、期待もしているので、頑張ってください。

久保局長：御指摘のとおり、公務員は制度に適用して仕事をする側面があるが、相談を聞く、一緒に動くことも含めて支援だと思っている。制度は、基本的にはツールであり、制度に当てはめるのではなくて、人に寄り添った支援をしていく姿勢の大切さを改めて言っていたらいいと思っている。

岡田会長：ひきこもり支援について、京都市が具体的な提案をさせていただいていることには敬意を表したい。今回の議論の中でも、早期発見、早期対応ということについて当事者から見たらどう感じるかや、ひきこもり支援についての積極的な情報発信、京都ならではの寺社や教会等の活用等、非常に有益な意見を数多くいただいた。今回の取組は、新たな課題に能動的に対応できる仕組みとなる期待ができると感じている。意見具申案の修正については、事務局と会長の私にまかせて

もらってもよいか。(委員了承)

(2) 京都市ひきこもり相談窓口の名称(案)について

和田課長：(資料説明)

小野委員：愛称については、わかりやすい、柔らかい名前を付けた方がよいと考えている。若い職員の意見を聞く中で、こころによりそう、こころのよりどころという意味を込めて「ここより」というのはどうかという意見があった。また、ここよりはじめるという意味もある。また、ひらがなで記載した方がやさしさが伝わるのではないかと考えている。

岡田会長：いい感じであると思う。

大澤委員：具体的には浮かばないが、長くなくていいやすい方がいい。

小谷委員：3文字か4文字くらいがいいのでは。

源野委員：すぐには思い浮かばないが、時間が許すのであれば、公募してはどうか。「高齢サポート」の愛称を募集した時は、公募や発表を繰り返したことにより周知につながった例もある。

小谷委員：小野委員提案の「ここより」は非常に良い提案、素敵な言葉だと思う。早期発見、早期対応というのをあまり強調しすぎると抵抗がある人に、「ここからスタート」というメッセージになると思う。公募するというのも重要な意見であると思う。

源野委員：反対しているわけではない。「ここより」というのを採用するのであれば、しっかりと言葉のイメージの解説をつけて周知していけばよいと思う。

久保局長：ここで愛称を決めていただく必要はない。公募するかどうかも含めて検討させていただく。

(3) 閉会

岡田会長：これで本分科会は役割を終えることになる。皆様には、多大な御協力をいただき感謝する。